

拡大学校協議会 ～「槻の木高校の次の10年を見据えて」～

平成24年5月19日(土) 16:00より 於：本校応接室

[出席者]

平成24年度学校協議委員

浅野 良一さん(兵庫教育大学教授)、入江 和男さん(高槻市立第一中学校校長)、

柿原 勝彦さん((社)高槻市観光協会会長)、北浦 義己さん(現PTA会長)、

立石 博幸さん(元高槻市教育長)、宮坂 政宏さん((株)ERP編集主幹)

*ご欠席 芝井 敬司さん(関西大学教授)、永田 剛さん((株)類設計室教育事業部)

元学校協議委員

壺谷 修さん(元高槻市PTA協議会会長)、吹田 由美子さん(元PTA会長)

事務局

松本秀範(校長)、浅田和也(教頭)、小野山芳明(事務長)、

奥谷彰男(首席・生活指導室長)、山本尚(首席・学校運営室長)、

高田桂司(前学習指導室長)

今年度の第1回学校協議会は、本校が創立10周年を迎えるにあたって、元委員の出席も
お願いして拡大学校協議会として開催した。

開校からの10年間を振り返って、その折々の本校への思いと今後の課題について語って
いただいた。

その概要を次に綴る。

[はじめに]

松本校長：本校は、今年10周年を迎えます。委員の皆さんには、本校に関わられて特に印象的であったことや課題だと思われたこと、また、将来に向けての本校への提言など、厳しい意見でも結構ですので忌憚のないご意見をいただいて、記念誌に掲載させていただきたいと思っています。

[学校より状況報告]

松本校長：資料を基にお話します。まずは開校当初からの様々なデータによって推移を見

ていただきます。生徒数と生徒居住地域、1年生と3年生の進路希望、卒業生の進路、センター入試受験者数などなど。1年時と3年時の進路希望を並べているのは、入学時の進路希望を卒業時の進路決定までしっかりつなぐことができているかを検証するためでもあります。そういう学校でありたいと願っています。それから土曜講習、金曜講習、夏休みと冬休みの講習の日程と参加人数です。主要な国公立、私立大学の合格者数もまとめています。

その次は、1期から10期までの平日、及び、休日の家庭学習時間の推移です。我々はこの家庭学習の習慣化と学習時間の伸長のためにいろいろと取組を重ねてきました。

そして、生活指導関係です。「規範意識なくして学力向上なし」ということで、遅刻数の変化に注目しています。保健室利用についても、本来の保健室の機能をしっかり果たしています。だから安易な利用者が極端に少ないのだと思います。クラブの加入率は、現在82%で、年々増加の傾向にあります。

次に、学校説明会について。本校、地域の公民館、地元中学校を会場として年間50回ほど開催しています。10年たってもなかなか我々が思っているほどには槻の木高校を認知してもらえていないというのが実感です。

それから、我々が今までに取り組んできたことを年表にしてみました。1枚目が学力向上のための学習指導、生活指導、進路指導の領域で、2枚目は校内組織、学校行事、国際交流、地域との関わり、施設・設備の括りで、それぞれの変遷を示しています。

年表と資料を見ていただきながら、これまでを思い出しつつ、これからを語っていただければ幸いです。

[地域住民・地元教育関係者として槻の木に思うこと]

壺谷さん：私がちょうど高槻市PTA協議会の会長をしているときに、島上高校と高槻南高校との再編の話があり、いろいろと議論があった当時を思い出します。初代校長の河村先生から現在の松本校長先生へと受け継がれた指導力のもと、地域から見ても、ほんとうにいい学校、自慢できるぐらいの学校になっていると思います。

柿原さん：私は、島上高校を卒業して東京に出て、15年ほど経って、帰ってきた当時の中学校も高校も乱れていました。海外にも長くいたのですが、日本の教育の変わりようにびっくりしました。そう嘆いていたところに、島上高校と高槻南高校との再編の話があって、2つの高校が一緒になって校風がどう変わっていくのかと思っていました。校風というのは、本当に教育を担う方々の熱意、教育現場における情念のあり方でどうにでも変わります。私が協議委員をしていて思うのは、槻の木高校の先生方がものすごく仲がいいということ、それと校長先生のリーダーシップがすばらしく発揮されているということです。チ

ームワークでいろいろな課題に挑戦しながらも、細部にわたって検証されている、そういう形で教育に全力を費やされているこういう学校があることが、わが高槻の誇りになっていくのではないかと考えています。

立石さん：私はずっとこの近所に住んでいますが、地域での槻の木高校についての見方はずいぶん変わってきていると感じております。以前の私の教え子たちがわが子を槻の木高校に入りたいと言っているのをあちこちで聞きます。非常にうれしく思っております。

入江さん：地元の中学校から見ると、槻の木高校はなかなか入りにくい学校に成長したという印象です。それは言い換えると、この学校がよい学校になっているということだと思います。10年で一人前、パイロットにしても10年フライトしていたら1万キロぐらいで一人前と言われるように、今やこの槻の木高校は一人前以上であると思います。これが槻の木高校のブランドだというものを表に出して、看板としていけるようなものがが必要です。校長先生がよく言われる「文武両道」はそのとおりだと思います。丁寧な指導の結果、進学状況もどんどん伸びていますし、外から見ても、槻の木の先生方は私立高校以上のことをやられているように思います。

[保護者として槻の木に思うこと]

吹田さん：当時、学校説明会で担当の先生が熱弁をふるわれるのを子どもが聞いて来て、次の日に新設の槻の木高校に進学したいと言い出しました。親子で大げんかをして、私は大反対だったものですから。将来どうなっていくのかわからない新設高校に行くことの不安から反対されていた保護者の方は多かったのではないかと考えています。ただ、変わっている学校という言い方はおかしいですけれども、新しい試みをたくさんしてくださるということと、子どもたちが自分たちのやりたいことをやれるのかなというのが垣間見えるようなカリキュラムだったということに、子どもたちは魅力を感じていたのかなと思います。でも、1期生はすごくはじめていた部分と、先生方にお尻を押されていた部分とがあって、いろんな意味でまだはっきりと形が定まらない中で、子どもたちにとっての槻の木というのはすごくしんどい存在でもあったようです。そんな中でもクラブ活動など自分のしたいことを見つけて巣立っていった子が多いのではないかと考えています。そういう意味でひとり立ちできる子どもの芯となるものを育てていただけるような学校になっていただければという思いがあります。

北浦さん：私の場合は槻の木という1つの形ができた中でのPTA会長でしたので、あまり戸惑いは感じませんでした。学力向上では塾並みの取り組み、生活指導面では規範や礼

儀において私学並みの指導できっちりとやっている。その辺は実際に見せていただいて間違いなかったという感想です。先生も一生懸命やっている、子どもも一生懸命やっている。そこで親がそれを正しく見ないといけない。先生のモチベーションが下がらないように。先生が積極的に授業に取り組んでいただければ、子どもたちの学力形成のみならず、快適な学校生活を送れるのですから。PTAが足を引っ張らないようにと心を砕いています。

[槻の木にかかわって思うこと]

浅野さん：槻の木高校が短期間で軌道に乗った要因として考えられるのは、まず1つは、基軸がぶれなかったということだと思います。つまりお客さんにこびなかったということ。誰でもいいから来てくれ、定員が欲しいのだということじゃなく、こんな学校にするからこういう子に来てほしいとはっきり打ち出したことです。一貫していたところ。2つ目は、組織づくり。再編された時はいろんな新しいことをやるのが常ですが、それを回すための組織づくりを怠るケースが多いのです。内を固めるのは非常に地味な作業で、かつ面倒な作業なのです。ですから普通おろそかになってしまうのですが、槻の木は、先ほどの取組をまとめた年表の中に組織づくりという項目がきちんとあるぐらいですから、かなりそこを意識したということ。3点目の成功理由は、常に目に見える成果を出し続けたということ。頑張っているよと言っても結果が出ていない、頑張っているよねとなかなか周囲が言ってくれない、それでは先生のモチベーションが上がりません。そして4つ目は、地域の後押しがあったということ。高槻城趾で場所もよく、高槻の顔として押してやろうかと。ですから、他の高校にない新しいところは、地域が押しているということと、組織が通常の学校と違うということ。つまり、新しいタイプの府立高校の提案をしているような気がするのです。大阪府のこれからの新しい高校のあり方の1つのモデルとして、こういう学校でもうまくいくという提案をしているところが、この10年の軌跡の最大の成果じゃないかという気がします。

宮坂さん：私も開校前からこの学校に非常に注目してきた一人でした。開校前の日本の状況はと言いますと、全国的にゆとり教育や5日制に代表される、要するにある意味日本が高度成長を止め、進路がわからなくなって迷っている時期、方向性がわからなくなってたってきたところに、経済的な規制であるとか、日本がこれ以上伸びないような規制がかかってきた、そういう時代背景があったと思います。ところが学校現場は、まずグローバル化というのがベースとなり、例えば5日制に対応できた私学に比べて、府立高校が地盤沈下していったというのは事実だと思います。規律の面でも個性化とか自由化とか言われる中で、間違った個性化や自由化の波を受けたのが公立学校。規制改革のおかげで、教師が何もできなくなってしまふ、そういう時代背景があったと思います。その時代にあって、「規律ある進学校」を打ち出したのです。1つは、学びということ。学校というのはき

ちっとした学びを保障する場なのだということです。もう 1 つは、社会に将来出ていく子どもの育ちをどう保障していくのかということです。その学校としての原理原則をきちっと守られたというのがこの学校だったと思うのです。公立学校としては稀有な存在としてきちりやっこられた。進学と規律、要するに背景となるものは学びと育ち、これら学校の原点をきちっと見つめて、それを制度化して、一致団結して邁進した。これは府立高校の歴史においてもなかなかすばらしい学校であったのではないかと。

[各委員から槻の木高校への提言]

浅野さん：いわゆる高校の王道を歩むということです。小細工はいらない。「規律ある進学校」という開校時からの基軸をぶれさせない今のやり方を、体に染みつくまで徹底的にやっこ、発信し続けたらいいのではないかと。

入江さん：まず、3校合同の同窓会を大事していくべきだと思います。やはり島上高校、高槻南高校という土台の上に築かれていくという意味で。それと、この次をどう展開していくのか、次の段階への戦略をどう打って出るのかということです。次に、知、徳、体の徳育の部分の充実を図ってほしい。さらに、校長先生やスタッフが変わってもこの体制で推進していけるがちっとしたシステムを構築・維持してほしいと思います。

柿原さん：いわゆる旧態依然とした府立高校から質を変えるという大きな10年だったと思います。その質をもとに槻の木スピリットを確立して、今後10年のストーリーを作り上げていくことが大事だと思います。そして、できたクオリティの基準をどの辺に置くかがこれからの課題だと思います。

北浦さん：創立当時は高槻市内からの子どもが多かったようですが、今はかなりバランスが変化してきています。だから親同士の顔が見えないPTAになりつつあるので、せっかくここまでつくり上げてきたPTAの親子の関係や横のつながりを強化して、面として学校と子どもたちを包めるような形でやっていきたいと考えています。

立石さん：私が中学校で教えた子どもたちのその子どもがちょうど高校へ行くような年齢になっています。槻の木高校は難しくなっけてうちの子では入れないという話を聞きます。うれしいような悲しいような何か不思議な気持ちになります。その辺を何か整理できるような方法はないかと思っながら過ごしているところです。それともう1つ、高校生の間に、日本の伝統文化を身につけるような機会をクラブ活動等で与えてほしいという希望を持っています。

吹田さん：学校も人間と同じで新しいものを入れていくことが大事です。ただそうすることでせっかくなきちんと定まってきた軸がぶれるようではいけないでしょう。ここからの10年、何をしたいのか、何をどうしたいのかということ鮮明に打ち出していただいて、それに沿った学校づくりをしていただければと思います。

壺谷さん：進学実績では、東大、京大へ、ぜひとも次の10年で何人か。それとクラブではサッカーで国立、野球では甲子園。槻の木に関わった者の希望というか夢として、頑張っ実現していただきたいと思っています。地域から高く評価されているのは、何と云っても子どもたちの生活、授業態度の規律正しさ、そして、子どもたちの元気なあいさつです。そういう基本的なルール、マナーの部分これからもちきちんとやっていただきたい。ますます地域からの尊敬の念を集める学校になっていくと思います。

宮坂さん：これまでのいろんな実践について、もう1度、評価・整備をしていただいたらいいのではないかと思います。先生方の意識も、子供たちの意識も常に一歩前を見て、日々新たにという部分が非常に大切なのではないかという気がします。初代の河村校長先生は教育に対する価値観であるとか、ビジョンみたいなものを強くお持ちでした。例えば目に見えるシステムづくりです。学校の組織、HR合宿や勉強合宿、それから土曜日や夏休みの講習、0時間目授業とか、どれもはっきりと見えます。大きな旗を持って、学校の前ではなくて交番のところの横断歩道で、ぱっと旗を広げて交通安全指導。「見える化」です。生徒や先生方に対しても、地域に対しても、学校というのはここまでやってくれるのだと、きちん責任もってやってくれるんだという象徴的な旗だったと思います。成果に向けたパフォーマンスというのも非常に大切です。これからは、今の生徒に合った、少しずつ伸ばしていける、今までの蓄積をベースに評価をしていけるそういったシステムづくりやパフォーマンスが必要だと思っています。

[終わりに]

松本校長：入学した4月に子どもたちに進路希望を書かせます。将来の夢です。その夢が実現できる学校にしていきたい。それと、高い規範意識をもって、いつどこで誰にお会いしてもきちんとした姿勢と心構えでやっていける子どもたちを育てたいというのが我々の思いです。子どもたちの成長のために、スクラップとビルド、すなわち、捨てるものは捨て、必要なものは新しく立ち上げる。そこを明確にしなが次の10年を見据えたいと考えています。

皆様方には、これからもぜひとも槻の木の学校づくりにお力添えくださいますようお願いいたします。本日のご協議に感謝申し上げます。